

國學院大學學術情報リポジトリ

劉知幾『史通』研究：
その学問形成と展開を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 名越, 健人, Nagoshi, Kento メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/2517

論 文 要 旨

学籍番号	203204	氏 名	名越健人
論文題目： 劉知幾『史通』研究—その学問形成と展開を中心として—			
本修士論文は劉知幾の学術思想について、Ⅰではその形成を、Ⅱでは中唐期の学術思想への展開を中心に解明するものである。以下、章を追ってその要旨を示す。 Ⅰ第一章では、「家学」という視点から、彭城劉氏の家風と学術について検討した。彭城劉氏は、北朝において高い学識によって高官を輩出した名門であり、劉知幾の祖父や父は、史書編纂に携わり、高い才筆を有していたことが確認できた。劉知幾はこうした才筆の誉れ高い親族の影響や彭城劉氏が代々継承、蓄積した学術に触れて、自らの学問を形成したことを指摘した。 Ⅰ第二章では、王元感の学術と『史通』に及ぼした影響を検討した。王元感は当時の公式な経書解釈である『五経正義』とは相違した解釈を行っており、劉知幾はそれに賛同していた。また、王元感の『尚書糾謬』・『春秋振滞』の二書をはじめとした経書解釈の立場は、『史通』へと継承されていたことを指摘した。 Ⅱ第一章では、『史通』疑古篇に示される『尚書』・『論語』の記述への疑義を、手法の相違から、他の文献を「諸子の異説」として引用した例と、歴史的故事と比較がなされた例とに類別し、上古の聖人も近世の君主と同一視する認識が、疑古篇の中核として通底していることを明らかにした。こうした認識が、劉知幾の子息の劉秩を介して杜佑『通典』に継承された痕跡や、陸淳の聖人観も同一の方向性にあることも指摘した。 Ⅱ第二章では、申左篇で説かれる『左氏伝』の優位性は、劉知幾以前の学説を踏襲しつつも、より「史」という側面が前面に押し出されていたものであったことを指摘した。さらに惑経篇に列举される『春秋』への疑義を、その手法の相違から、『左氏伝』及びその学説に依拠した例、実録と直筆が不足した箇所に向けられた例、傍証として『汲冢書』が引用される例とに類別した。また、疑義の背景について、劉知幾は実録・直筆による勸善懲惡を史書の責務とし、『汲冢書』には、史書を補完する役割があるとする、独自の評価を与えていたことが確認できた。以上から、『春秋』への疑義は『左氏伝』及びその学説に依りつつ、劉知幾が理想とした史書観に立脚したものであったと位置づけられると指摘した。併せてこうした疑義が、中唐春秋学に影響を与えた痕跡も指摘した。 以上の検証を通して、劉知幾の学術思想は、その形成要因が家柄や周辺人物に認められると指摘でき、中唐期の学術思想の萌芽として位置づけられる可能性もはらんでいると結論付けた。			
キーワード（5語） 劉知幾、史通、彭城劉氏、尚書、春秋			